

寄稿エッセー

勝桂子の 通仏教でいいこう！

◆第1回◆

釈尊はお城を出られる前、どんな思想を浴びていらしたのだろう。そこが知りたくて、2年前からサン・スクリット語をかじっている。コロナ様のお陰で、インドのアシラムでパーニニ文法を教えるミチカさんという日本人女性から、オンラインで毎週末のべ6時間、教えていただく機会に恵まれている。

ミチカ先生いわく、「ヴェーダはインド人でなくても、何教徒でも、人間であれば誰でも学ぶことができます」。

ヴェーダそのものは師から口伝で学ぶべきもので、オンライン講座にはそぐわないので、ヴェーダ思想が織り込まれているシユローカ(古典詩)やラーマヤナを文法解説とともに詠唱しながら、思想の一端を学んでいる。

このヴェーダ思想のなかには、梵我一如も、三毒(パーバ)が過ぎてはダメといったことも、この世が欲を駆り立てる実体のないもの(マヤー)で満ちていることも、私たちが何も学ばず(智慧なく)しては真実が見えていないということも含まれている(次回

釈尊は宗教創始を考えなかった!?

で述べる「中道」という考えこそが、釈尊オリジナルだ。

釈尊は当初、新たな宗教を興そうと意図されてはいなかったのかもしれない。当時、シルクロードを行き交う商人たちから金品や珍品を献上され裕福となったバラモン階級があまりに墮落していたため、聖者と可能性をもち宗教となった点ではないだろうか。大多数の人が宗教アレルギーに陥るこの国で、もうい。「スッタニパータ」の

いま、何教徒でも学べる教えを

中に、「こういふことをするを浸透させようとするならば、宗派の教えや特定の経典から離れたところから、何教徒でもできる」ところから、断ら説き直すのがよいのかもしれない。

大手書店では十数年来、仏像写真集が平積みで大人気のスマートフォン待ち受け画面専用の仏像写真配布サイトまで存在している。仏像人気に象徴される通り、「釈尊の教えにふれたい」と願う市民は多い。宗祖さまの教えを乞う人よりも、おそらく何十倍も多

も取り組んでいる。鎌倉建長寺で外国人向けの坐禅指導をされていた知人僧侶は「この部屋は、イスラーム教徒とユダヤ教徒がひとつの畳の上でも坐禅を組んだ、世界で唯一の場所」とおっしゃっていた。仏教の素晴らしところは「何教徒でも取り組むことのできる精神哲学」に、瞑想や念

すぐれ・けいこ氏=1965年、東京都出身。国際基督教大教養学部卒(仏教思想史専攻)。著書に『心が軽くなる仏教とのつきあいかた』『いいお坊さん ひどいいお坊さん』など。各地の僧侶研修に携わる。

野の仏を訪ねて



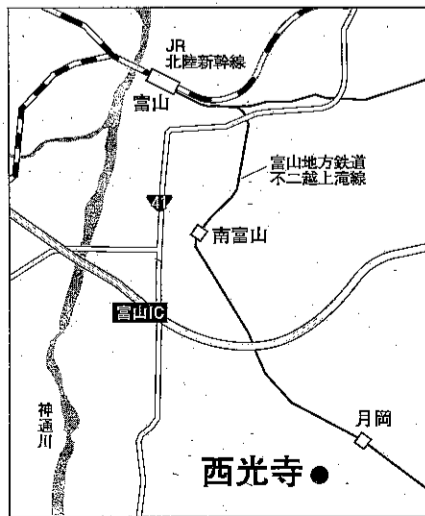
准胝観音像

(富山市中布目・西光寺)

准胝観音とはあまり聞き慣れない観音である。光背の中央に浮き彫りされた坐像で、像高は約30センチ。手は説法印を結び、

富山市中布目の西光寺に祀られている。基壇には波頭が刻まれて

曹洞宗西光寺は旧名を大安寺といひ、応仁の乱後の文明年間に創建され



衆生の惑業を破り

諸願かなえる観音

准胝観音は梵名の「チユンデー」の音写で、准胝母とか七俱胝母とも呼ばれている。七俱胝の母とは過去無量の諸仏の母との意味で、観音と

准胝観音は梵名の「チユンデー」の音写で、准胝母とか七俱胝母とも呼ばれている。七俱胝の母とは過去無量の諸仏の母との意味で、観音と



子の冥福を祈って臺石に彫られた准胝観音像

准胝観音は梵名の「チユンデー」の音写で、准胝母とか七俱胝母とも呼ばれている。七俱胝の母とは過去無量の諸仏の母との意味で、観音と

殿南真賢・浄土真宗本願寺派願興寺住職

寄稿エッセー

勝 桂子の 通仏教でいいじゃない!

◆第2回◆

仏教は、梵我一如などのヴェーダのエッセンスを背景に、四つの階級から離れ、バラモンでなくても(インド人でなくても)学び説けるようにした教えであるといえる。結果、バラモン教ないしヒンドゥー教はインド以外の地域にひろまるのがほとんどなかったが、仏教思想は東アジアはじめ世界中へとひろまった。

では、ヴェーダの教えにない、釈尊オリジナルの教えの神髄は何かといえ、**「中道」**だと思ふ。

ヴェーダは、パーパ(よくない行為)を減らし、プンニヤ(善行)を増やしなさいという教えが中心にあり、善・悪という二項概念が存在している。ヴェーダの実践者も、悟りきつてしまえばすべてがバガヴァーン(人ならざる超越的摂理。赤塚不二夫『天才バカボン』のバカボンの語源ともいわれる)の仕業と観ずることができ、悪い縁起もまた善いことの前兆であるように総体的に捉えるので、到達点においては善悪不二となると思ふ。しかし、釈尊が善悪分け隔てる

法令か仏法か狭間で悩む住職

ことを積極的に排除し、中央値でも平均値でもない「よきところ、ほどほど」を見極めよと説かれたのは仏教独自の特徴だろう。

私は行政書士なので、寺の規則変更や墓地許可の申請を行うことが多い。その際、「お寺(あるいは宗派)の常識」と「行政庁が求める法令基準」との間に差異や温度差があるため、宗教的理解と法令基準との間の通訳のような役割を果たすことになる。

「中道」こそ仏教の神髄

住職は、まじめで清廉潔白であらうとなさるかたが多いので、「できる限り法令遵守してきちんとしたい」とおっしゃるのだが、ガチガチに法律を守ろうとすれば宗教者としての直観的で迅速な活動が阻まれることにもなる。だから、ホドホドの中道を探ることが必要なのだ。

宗教法人法によれば、各々の規則に「予算、決算及び会計その他の財務に関する事項」を明記することになっている(宗教法人法第12条第1項第8号)。つま

り、他の公益法人等と同様に、毎年予算・決算を責任役員会で承認してもらったのが正しく、大きく予算からズレた支出を行うような場合には責任役員会議を開いて補正予算を組むなり、予備費を充当するための承諾を得るべきである。

だがそれでは、たとえば地域で災害が起こった場合、宗教者としてすぐさま「救いの手」を差し伸べようと、炊き出しに必要な鍋釜や布団を手配したくても、責任役員会議を開かなければ決定できないこととなり、ほんらい寺院に求められるべき「行政の手が届かないところの支援」が硬直してしまふ。

むしろ、「法律はギリギリの線を守りつつ、網の目のからこぼれてしまった人をひとりでも多く援けたい」と、ときには法令を逸脱して先走り、行政から目を付けられる覚悟もお持ちのご住職のほうが、宗教者としては正しいと思える瞬間もある。

法令か、仏法か。その狭間のホドホドの中道はどこか。こうした通仏教的な課題を語りう場が見当たらない。それが、一番の重大課題だ。

(行政書士・葬祭カウンセラー)

寄稿エッセー

勝 桂子の 通仏教でいいじゃん!

◆第3回◆

ある宗派の僧侶研修に登壇させていただいたとき、M・Kガンディーの不服従・非暴力の思想をご紹介したところ、「ガンジーはヒンズー教でしょ？ 仏教の研修なんだけども」と指摘されたことがある。

その御仁は、釈尊の生涯と思想を描いたエドウィン・アーノルドの『アジアの光』をガンディーがバガヴァッド・ギーターと同様に愛読していたことを「存じなく、Mウェーバーの『ヒンドゥー教と仏教』も読まれたことがなかったと思われる。

そもそも、仏教の研修だから他宗教の話は聞きたくない、すべきでない、という感覚はどこから来るのだろうか。

前回までに「仏教はウェーダーの思想を、4つのカーストがないエリアでも受容できるような翻案したもの」だったのではないかと解説してきた。今回は、仏教が宗教の枠組みを超えてひろく理解される思想であることについて、さらに深掘りしてみたい。

ガンディー記念館の元館長S・ラーダクリシュナン博士は著書『ゴータマ・ブツダ』のなかで、「ブツダ

宗教を線引きしない広い視野

の教えのなかには、教義と違うよつなものはほとんどない。(中略)(ブツダは)広い見解を持って、批判を抑えこむことをしなかった。ブツダは、不寛容は宗教の最大の敵と考えた」と述べている。

日本仏教寺院では、宗派間の意見交換さえ稀にしかおこなわれていないが、日常をマイナスには捉えなかつた。国外へ出たことで、もっと、別な宗教を知ること、他の宗教から学ぶ機会が増え、仏教のよさを再発見していたのだ。

私は10年近く前に、主宰

宗教間対話のススメ

する任意団体ひとなみで「イスラーム教を学ぶ」という勉強会をしたことがあ

る。日本人ムスリムのナセル永野氏をゲストに、イスラーム教の考えかたの基本を学んだ。

2時間ほどのレクチャーが終わると、参加された各宗派の僧侶・神職のほぼ全員が口をそろえ、「イスラーム教と仏教は、ほとんど同じだった!」と目を輝かせておっしゃった。

参加された皆さんは、もとより自殺対策などの活動で宗派を超えて対話をすることに慣れていらっしゃる

り、キリスト者や新宗教の方からも話を聞くことを積極的になさっていた。仏教界の今後を担うのは、こうした視野をお持ちの皆さんなのだろうと感じた。

チベット人のダライ・ラマ師も、宗教間対話を重視することでも知られている。宗教間どころか近年は、宗教と科学との橋渡しにも熱心でいらっしやる。

チベットは中国政府によって国を失う悲しい結果にはなったが、師は、諸行無常をマイナスには捉えなかつた。国外へ出たことで、他の宗教から学ぶ機会が増え、科学者とも対話する場面ができた。ダライ・ラマ師がキリスト者や科学者と語り、瞑想の科学的根拠を裏付けようとする姿をきっかけに、瞑想ブームが欧米世界へひろまったともいえる。

それは、釈尊の教えが祖国インドでは一度滅びたものの、東アジア全体へひろまっていった歴史と重なって、感動をおぼえずにはい

られない。ダライ・ラマ14世の『宗教を線引きしない広い視野』によって、国境という今生の世界でのみ通用する形(それを仏教では空という)が喪失されても、科学信奉の世のなかに仏教の精神が着実に残る足跡が築かれたのだから。

(行政書士・葬祭カウンセラー)

寄稿エッセー

勝 桂子の

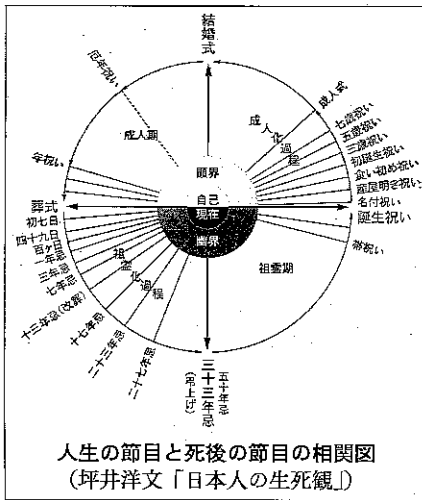
通仏教でいこう！

◆第4回◆

今回は、日本仏教の特殊性を、海外の仏教との比較から考えてみたい。

日本では、僧侶の大半は土曜日曜に回忌法要の依頼をこなすことで寺院運営を維持されているイメージがある。サラリーマンや公務員との兼業が成立するのも僧侶への読経依頼の多くが土日の法要時に集中しているからであろう。

日本仏教の中心行事とも思えるこの回忌法要は、実はアジアの他の仏教国にはなく、日本仏教独自のものだ。中国や台湾、ミャンマー、タイの僧侶にも聞いてみたが、存在しないのだ。葬祭カウンセラーの資格を取得するときに受けた講義によれば、回忌法要は、日本人が仏教伝来前からもっていた死生観を仏教にも取り入れた結果だといふ。



お天道さまが見ている

図は複数の文化人類学者が公表しているもので、時計の短い針が3時を指す位置から、反時計回りに読んでゆく。誕生から1週間での名づけ。ひと月半ごろ初宮詣り。百日目にお食い初め。1年で初誕生。七五三を経て13歳で元服(成人)……というように、時計の短い針が9時を指す位置まで生涯が続く。死後は昼夜逆転、衣の合わせも逆になった世界で生まれ直しの半生が始まる。このフリーズは、一対一

日本仏教は神仏習合教

日本古来の死生観では「死んだら終わりではない」の広角の視野で因果をとらだ。ゆえに、七日目、四十九日、百日目、一年、三年、七年、十三年……と、生きていくときと同じ節目で弔いをする。三十三年もすればあの世でも立派な大人だから、多くの寺院では「弔い上げでよいだろう」とされるわけだ。仏教は、各地域の土着の宗教とうまく融合しながら東アジア、南アジアへとひろく伝播した。ご存じのとおり南伝と北伝では別の宗教といえるくらいに違った内容になっているし、面白

いことに、ほぼ同時期に南ルートと北ルートの仏教が伝わったベトナムでは、念仏も坐禅も行い、浄土教と禅の融合が起こっていたりもする。

日本でも、春秋の田植えと収穫時にお天道さまへ祈っていた習慣が彼岸会として定着するなど、回忌法要のほかにも、他国にない催しが定着している。そこで昨今の一般市民の宗教アレルギーに着目し、「お天道さまが見ている」地域でも当たり前に言われていたことを、仏教寺院で伝え直してゆくことを推奨したい。

このフリーズは、一対一

日本古来の死生観では「死んだら終わりではない」の広角の視野で因果をとらだ。ゆえに、七日目、四十九日、百日目、一年、三年、七年、十三年……と、生きていくときと同じ節目で弔いをする。三十三年もすればあの世でも立派な大人だから、多くの寺院では「弔い上げでよいだろう」とされるわけだ。仏教は、各地域の土着の宗教とうまく融合しながら東アジア、南アジアへとひろく伝播した。ご存じのとおり南伝と北伝では別の宗教といえるくらいに違った内容になっているし、面白

(行政書士・葬祭カウンセラー)

行政書士・葬祭カウンセラー

査を行っていただく必要はないかと注文を付

寄稿エッセー

勝 桂子の

通仏教でいいじゃない!

◆第5回◆

あの世の存在を、心底信じていらっしやる宗教者の割合はどれくらいだろうか?

仏に救われたという実感のないまま僧籍を得て、宗教法人あるいは墓地の管理者として給与を得ていらっしやる方も、かなりの割合にのぼる。発心がなくても宗教者になれる時代背景自体また、仏縁なのだろう。

葬祭カウンセラーとして終活セミナーなどで「用いをしたほうがいい理由」を説明するとき、私は次のようにお話ししている。

『サビエンス全史』などの著者ユヴァル・ノア・ハラリ氏がおっしゃる通り、われわれホモ・サビエンスは他のサビエンスにない力。『目の前にないことを想像する力』を持ってしまった。それがゆえに文明もこれほど発展したわけだが、その力は死別のおとの気持ちを混乱させる。「あんなに素晴らしいことを言ってくれたあの人は、もうこの世にいない」と、眼れなくなったり、仕事が手につかなくなったりする。記憶があるために、代替のきかない大切な相手の非存在に気持ちの整理がつかなくなってしまうのだ。これに対応

不安解消こそ宗教者の使命

し、冷静になるための手段として、どの文化文明でも供養・用いの方法を発案しているのではないかと。講演の序盤では「私の葬儀にお金はかけたくない」「僧侶は呼ばず直葬でいい」と言っていた人々が「こんど息子夫婦を呼んでじっくり話をします」「孫たちも含めて、お墓のことを考えたい」と、考えを転換してゆく。

いまやお仏壇を置く家庭は、戸建ての場合で半数程は、「あの世」を語るべき理由。回答者全員が僧侶の人生相談サイトhasunohaを運営する堀下剛司氏は「苦悩に直面し、もがき苦しんでおちこちへ答えを求めてきた人が、僧侶のひとことによりやく救われ、肚落ちしたとき、はじめて仏教のよさを知る」と語る。

「あの世」を語るべき理由

度。集合住宅では4〜5世帯に1世帯である。生まれながらに先祖さまへ祈る習慣のない人たちの多くが、コロナ感染防止を理由に回忌法要をとりやめた。一時的にやめたのではない。それまで「親戚の手前」「親がせっかく続けてきたから」「なんとなく」で継続してきたが意味が感じられていない慣習を、コロナを理由に断ち切ったのである。技術や数値しか信用しなくなった人たちに、儀礼や供養の必要性を説き、檀信徒として取り戻してゆくことは至難の業だ。

しかし、「記憶や想像が目の前の事象と乖離しているとき、われわれは混乱する。そこで、『あの世にいる』『対話できる』と信じて祈れば落ち着くことができる」と論理的に説明するならば、供養をやめようとしている人たちを足止めすることができないのではないだろうか。